

医学系研究に関する情報公開文書

研究課題名	多発性骨髄腫に対する薬物投与経路の違いによる薬剤師関連業務状況に関する調査(後方視的研究)
研究責任者	石田 耕太
研究機関名	日本赤十字社医療センター薬剤部
研究目的と意義	<p>近年のがん領域における医薬品開発は目覚ましく、経口抗がん剤による外来加療が可能となりました。外来がん化学療法での薬剤師の業務展開としては、処方監査、注射抗がん剤の調製、患者さんへの説明・教育などがありますが、薬剤師が不足しているため、十分な関与ができていない状況です。しかしながら、経口剤のみの治療では患者さんは医師と薬剤師との接触のみとなり、抗がん剤治療における薬剤師の専門性を活かす必要性がますます高まっています。</p> <p>一方、新たな治療法として出現した免疫調整薬(IMiDs)は、催奇形性を有し、服薬プロトコルが複雑であるため、服薬ならびに取り扱いが難しく、更に医師による説明だけでは患者さんが理解するのがますます難しくなっています。このため、現在薬剤部では、IMiDsを処方された患者さんに対し、服薬カレンダーを用いて服薬管理を行っています。しかしながら、その効果および問題点についての検討はなされていません。</p> <p>今回、我々は将来的に薬剤師外来などを視野に入れ、服薬管理業務の現状を把握し、副作用マネジメントや今後の服薬指導時の重点的注意事項を検証することを目的とし、今回は多発性骨髄腫患者さんについて検討します。</p>
研究方法	<p>2017年6月から2019年3月までIRd療法(イキサゾミブ+レナリドミド+デキサメタゾン)およびRdにPI(プロテアソーム阻害剤)を追加した療法を実施した多発性骨髄腫の患者さんを対象に、下記について診療録を用いて後方視的に調査します。</p> <p>Rd投与患者さんで、投与経路が3剤とも経口剤であるIRd療法と注射剤とRd療法による、年齢、性別、投与量、治療歴、腎機能、肝機能、白血球値、血小板値、FLC、Mタンパク、有害事象発現、中止理由、減量・増量状況、薬局窓口での薬剤師が患者さんより聴取した内容および残薬数、服薬状況、服薬継続率、有害事象発症状況、病院滞在時間等を抽出します。</p> <p>得られたデータは本研究のみに使用し、氏名などの個人情報には公開しません。個人情報の保護には十分な配慮を行ったうえで調査します。上記対象に該当すると思われる患者さんで、本研究への登録を希望されない方は、下記の担当者までご連絡下さい。なお、希望されない場合でも今後の診療において不利益を被ることはありません。</p>
問い合わせ先	<p>日本赤十字社医療センター 〒150-8935 東京都渋谷区広尾4-1-22 担当者：石田耕太 TEL：03-3400-1311 FAX：03-3400-0585</p>